

## I 学校の概要

### 個を活かす協働的な学びの推進モデル校事業 坂出市立坂出小学校

#### ◆児童数及び教員数

○児童生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
3学級 72名	4学級 107名	3学級 85名	3学級 91名	3学級 97名	3学級 96名	5学級 22名	24学級 570名

○教員数 34名

#### ◆学校の特徴

本校は、平成22年に坂出市立内の3小学校の統合により設立され、本年度より瀬居地区が新たに加わった。校庭一面に広がる芝生は地域のボランティア活動により管理され、児童だけでなく地域の方々にとっても集いと憩いの場となっている。本校の児童は、素直で前向きに取り組む児童が多く、家庭の学校教育への理解も高い。しかし児童数の増加に伴い、学力の二極化、個別の支援を要する児童も増加傾向にある。

そこで、「チーム坂出小」を掲げ児童たちの学びを学年団の縦と横のつながりで「そろえること」と「工夫すること」を大切にしながら、チーム力で児童の「主体的・対話的で深い学び」を補償しようと授業改善に取り組んでいる。また、「I'm OK. You are OK.」を合い言葉に「自分の大切さとともに、人の大切さを認める」ことを大切に、安心した学校、学級を基盤に共に学ぶことの楽しさを実感させたいと研究を進めている。

## II 研究主題等

研究主題

一人一人が 感じ・考え・実践し ともに分かち合う児童の育成  
～転移・活用できる状況づくりから広がる学習を求めて～

#### ◆研究主題設定の理由

本校では、理科学習を中心として、個を活かした協働的な学びを推進していきたいと考える。その際、一人一人が主体的に問題に関わり考えるだけでなく、他者と関わりながら「こんな方法や考え方があった」「どうして、友達はそう考えたんだろう」「どうしたら解決できるのだろう」と粘り強く問題を解決しようとする態度を育成していきたい。そうすることで、自分の生活に目を向け、学んだことを日常の事象に当てはめたり、さらに新しい課題を見付けたりして、自分たちで生活をよりよいものにしていく児童が育つと考え、本主題を設定した。

また、本校では令和3年度全国学力状況調査及び県学習状況調査の結果から活用問題を苦手になっている児童が多いことが分かった。教科書に出ている同じ内容、同じ問題ならば答えられる一方で、違った場面や文脈では答えることができないという課題が明らかになった。そこで、「転移・活用」を授業改善の視点としたい。単に学んだことの知識の再生ではなく、未知の内容に対して、自分たちの生活の中から「もっと調べてみたい」「習ったことを次に生かしてみたい」「結果から〇〇が分かったからもしかしたら、△△が言えるかもしれない」など1つの学習課題が次の学びや興味へと連続して続いていくことを目指したいと考え、副主題を設定した。

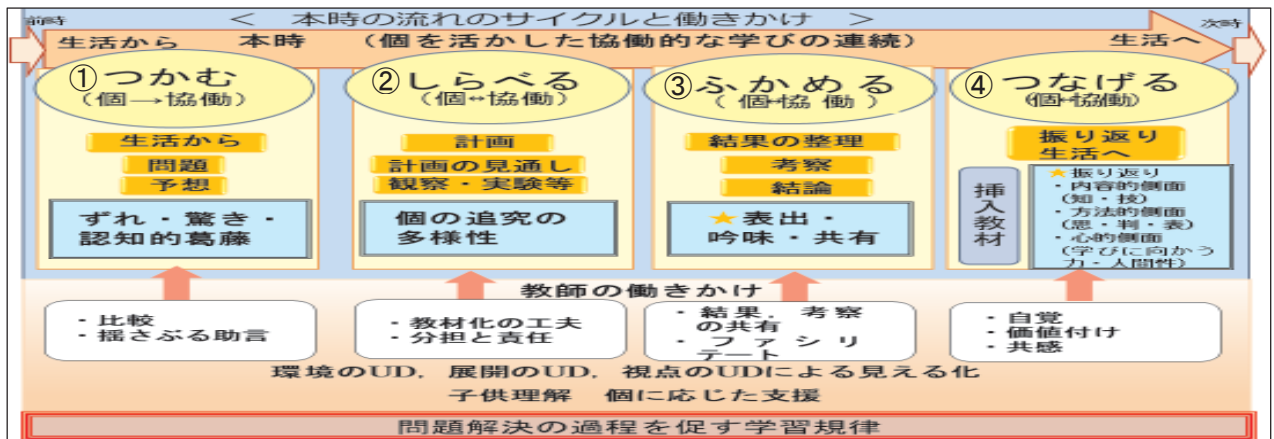
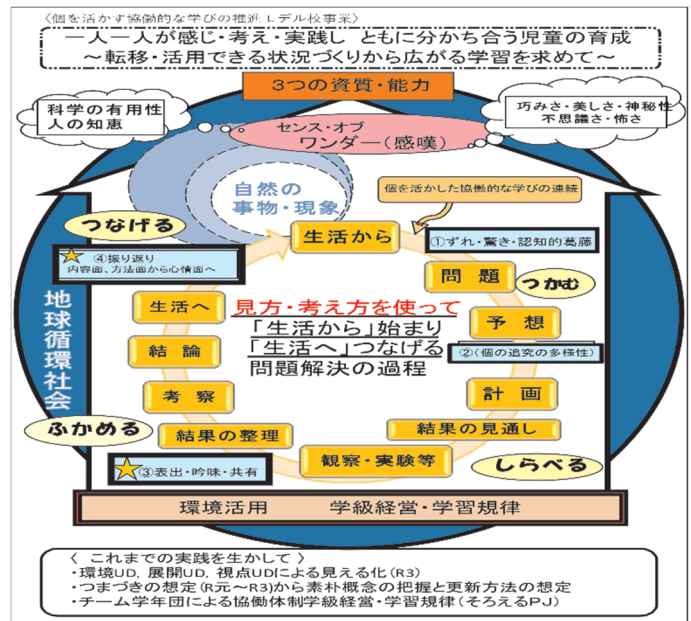
## ◆研究内容及び方法

### 1 個を活かす転移・活用できるしかけを意識した単元化、教材化（単元レベル）

生活から始まり、生活へ転移・活用しながらセンス・オブ・ワンダーを大切にしながら過程を工夫する。子供の文脈でストーリー性をもって学べるよう配列や学び方を工夫し（単元化）、自然の事物・現象から何を選び、どのように加工して子供に合わせるか（教材化）に重点を置く。

### 2 個を活かす協働的な学びに向けての働きかけ（本時レベル）

下図のように本時の流れを①つかむ②しらべる③ふかめる④つなげるの過程に分け、それぞれの教師の働きかけを明確化した。図に示す①のずれ・驚き・認知的葛藤②の個の追究の多様性③の表出・吟味・共有④の振り返りの中で、本年度は③表出・吟味・共有④振り返りに重点を置いている。



#### (1) ふかめる（結果の整理・考察・結論）～表出・吟味・共有～

個と全体の結果が見て分かるように表出の仕方を工夫する。そして、全体と部分を見ながら明らかになったこと、まだ明らかになっていないことなどを協働的に吟味していくようにする。全員の考えが板書に整理されつつ、収束の話合いをファシリテートしたい。

#### (2) つなげる（振り返り・生活へ）～内容面・方法面・心情面～

結論とつながる生活の事物・現象を教材化して挿入し、転移・活用（apply or use）の思考が生まれるようにする。さらに、挿入教材がきっかけとなり子供の思考が広がるようにしたい。振り返りでは、知識を捉え直す内容面：知識・技能、協働的な学びの価値を意識する方法面：思考・判断・表現、そしてその時感じたセンス・オブ・ワンダーを言語化する心情面：学びに向かう力・人間性の涵養の3視点を大切にする。

### 3 「自然を愛する心情」を広げる学校・家庭・地域との連携

日常で起こっている事象を一度立ち止まって見つめ、自然の不思議さや巧みさ、科学の有用性を感じることを大切にしたいと考える。そこで、「ワンダー」（自然の美しさ、巧みさ、神秘さ、不思議さに目を見張る感性）を合言葉にタブレットを使ったワンダー見つけたよ活動などを行っていき、研究を進める。

### 4 研究を支える組織

- (1) 学年団を核とした授業開発チームでの授業実践
- (2) 「授業づくり部会」「学習規律・学級経営部会」「環境活用部会」を中心とした研究推進

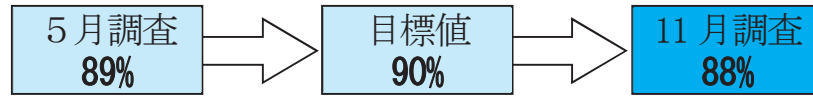
### Ⅲ 研究実践

#### ◆指標設定と達成に向けた取組

##### 1 個を活かす転移・活用できるしかけを意識した単元化、教材化（単元レベル）

（児童質問紙） 理科や生活科の勉強は日常生活に役立っていると思いますか。

指標 「①よく分かる+②だいたい分かる」の合計



指標の達成に向けた実践

##### 実践1 単元を貫く問いの設定型（4年理科「雨水のゆくえと地面のようす」）

The first photograph, titled '第一次 ふしぎ発見' (First Time: Discovery of Wonders), shows a classroom display board with various diagrams and photos of water puddles. A red box highlights '子どもの気付きからスタート' (Starting from children's observations). A speech bubble contains the following questions: 'どうして、水たまりができる場所とできないところがあるの？' (Why are there places where puddles form and places where they don't?), '雨水が流れているのは？' (Where is rainwater flowing?), and 'どこに行くの？' (Where is it going?). The second photograph, titled '第四次 学校よくし隊' (Fourth Time: School Improvement Team), shows two children in white uniforms working on the ground. A speech bubble contains their observations: '仲良い教室に行くときに、水たまりが多くあって困っているよ。' (When going to a good classroom, there are many puddles and it's troublesome.) and '雨水がたまらないように、砂利をひくと水がしみ込みやすくなるね。' (To prevent rainwater from accumulating, raking the gravel makes it easier for water to seep in). Below the second photo is the caption: '○学んだことを活用し、校内の水がたまりやすい所を改善' (○Using what they learned, they improved places in school where water tends to accumulate).

第一次は、学校の水溜まりの様子の子の気付きからスタートした。その際、問いが学級全員の問いとなるように話し合いの場を大切にした。第四次では、第一次で疑問をもった水溜まりが多くできた場所について、再び考え、水溜まりがなぜその場所にできたかを地面の傾きと粒の大きさをもとに考察した。子供の気付きを基に問いを追究したことで、最終では、学校の運動場を学んだことを使って改善しようとする児童や自宅の駐車場に敷き詰められている砂利の目的などについても興味をもつ児童など日常の生活場面で学びを活かそうとする児童へとつながった。

##### 実践2 児童の思いや願いから単元を貫く課題の設定（2年生活科「せかいでひとつわたしのおもちゃ」）

The photograph shows a large display board titled '単元のストーリーを見える化したサブ黒板' (Story-based Sub-blackboard). The board is filled with photos, diagrams, and text related to the unit 'せかいでひとつわたしのおもちゃ' (One toy for the whole world). A speech bubble contains the text: '単元の流れやゴールを示しておくことで、目的意識や相手意識をもって、学習に取り組むことができた。' (By showing the flow and goals of the unit, we were able to engage in learning with a sense of purpose and awareness of others).

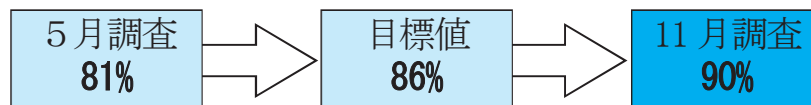
1年時におもちゃ祭りに招待してもらったことを想起させ、「おもちゃ祭りをしよう」という、単元を貫く課題を設定した。単元の流れが見えるサブ黒板を置くことで、次に何をすればよいのかが見通しをもって学習することができた。また、1年生をおもちゃ祭りに招待するというゴールを示すことで、目的意識、相手意識をもって学習に取り組むことができた。

## 2 個を活かす協働的な学びに向けての働きかけ（本時レベル）

（児童質問紙） 普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。



（児童質問紙） 授業では、学級やグループの中で自分達で課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習に取り組んでいますか。



### 指標の達成に向けた実践

(1) ふかめる（結果の整理・考察・結論）～表出・吟味・共有～

実践1 実験結果の視覚的な共有（3年理科「風やゴムで動かそう ～めざせ！風ゴムマスター～」  
5年理科「物のとけ方」）

全ての班の実験結果と表とグラフで表出し、視覚的に分かりやすく、吟味・共有しやすくした。また、協働して話し合う中で、グラフに帯を置くことで、結果から何が言えるのかを共有した。

このグラフを見て  
どんなことが言えるかな。

…ということは、水の温度を高くした時も、どちらも溶ける量は増えそうだな。

食塩もミョウバンも水の量を増やすと、溶ける量が増えているよ。

実践2 決まりの活用場面の挿入（6年理科「見つけて使おうてこのはたらき」）

実験用てこで左右のうでの重さと視点からの距離の積が等しいことを見つけた子供たちに先生からの挑戦状を渡し、班の友達と話し合いながら掛け算の決まりを使ってどんどん解決していった。さらに自分たちの実験用てこでは適切な重さがなく、つり合わせるができなかった場所も「自分達で粘土を使っておもりを作ればよい」というアイデアを活かして重さを調整したことで、見つけたきまりが活用できることを実感し共有していった。

きまりを使ってつり合わせるよ！

すごい！粘土を使うとつり合ったよ！

ワンダー!!

(児童質問紙) 授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。



### 指標の達成に向けた実践

#### (2) つなげる(振り返り・生活へ)～内容面・方法面・心情面

##### 実践1 本時の学びを身近な生活につなげる場の設定(4年理科「雨水のゆくえと地面のようす」)

挿入教材として坂出の名産である「金時にんじんの畑」と「水田」のミニチュアモデルを使い、同時に水を流し、しみこみ具合の違いを見せた。子供たちは自分の住んでいる地域での農作物の特性に合わせた活用場面を知ってさらに驚いたり、納得したりする様子が見られた。



ふ ぼくは、田や畑の様子を見て水を早く落としたい時は、つぶが大きいのをを使って、水をためたい時は、つぶが細かい小さい物を使っているんだと分かりました。ぼくも生活の中で、そういうものを見付けたいです。ぼくの家の庭の砂利は水がたまらないようにしているんだと思います。(振り返りより)

##### 実践2 友達との交流を通して、学んだことや友達のよさを振り返る

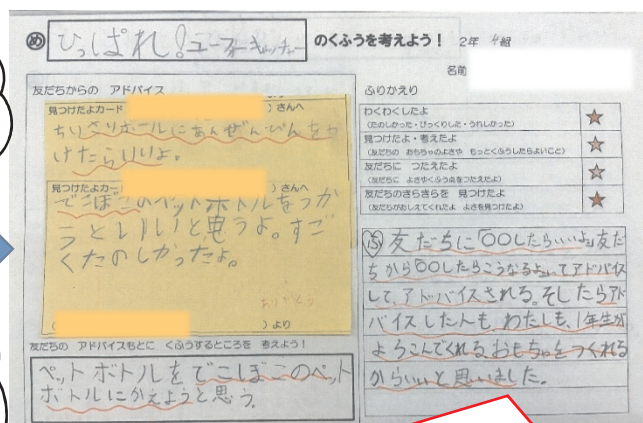
#### (2年生活科「せかいでひとつわたしのおもちゃ」)



楽しいね、  
でも、なかなか  
進まないよ。



楽しかったよ。  
もっと軽くす  
ると車が進む  
と思うよ。



#### 教師のコメント

すごいね! アドバイスがおもちゃまつりにつながることに気づけているね。

低学年では、友達との交流や活動後に書く活動を意図的に取り入れ、毎回視点を示し振り返りを積み重ねたことで、多くの児童が自分から進んで振り返りが書けるようになった。また、ポートフォリオ的に残すことで子供自身が連続的に学びを自覚でき、教師も全員の気付きを把握した上で次時の指導に生かすことにつながっている。

### 3 「自然を愛する心情」を広げる学校・家庭・地域との連携

#### 5 (児童質問紙) 身の回りにおける不思議を見つけることが好きですか。



#### 指標の達成に向けた実践

##### 実践1 身近な自然や事象を見つめる ワンダー☆発見カード

学校や自宅、地域の自然について発見したことをワンダー☆発見カードに記録したり、児童玄関に貼って見付けたことを共有したりしている。

<環境活用部会>

**身近にある  
不思議・驚き・感動を  
お子さんと共有しませんか**

「心が動く」瞬間。そんな瞬間が積み重なるほど、日々の生活は楽しく、豊かになります。

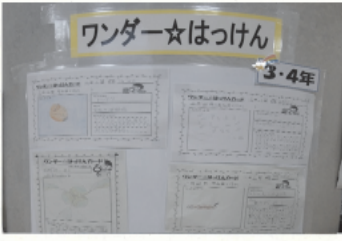
何気ない景色、季節の足音、おいしい食べ物、我が家ならではの行事…。気付かず通り過ぎていたことに、ふと立ち止まり、五感を使って存分に味わう。そして、家族で、学校で、学級で、語り合う。子どもたち個々の、瑞々しく斬新な感性に驚き、認め合い、受け入れていく。

そんなあなたに時間や経験が、子どもたちの「世界を見る目」を豊かにし、人や社会に好意的にかかわっていただける力になるのではないかと。そこで…


**「ワンダー☆発見カード」始めました**

ご協力、よろしくお願いたします。

保護者への啓発ポスター



ワンダー☆はっけんコーナー




ワークシート

見て見て！運動場の芝生が白くなっているよ。ブランコも凍っているよ。



<タブレットで霜を撮影するある朝の1年生>

##### 実践2 ホームページで子供のワンダーを発信



## 坂出市立坂出小学校

Sakaide elementary school

〒762-0042 香川県坂出市 白金町一丁目3番7号  
TEL 0877-46-2124 FAX 0877-46-2147

Welcome! 坂出小学校のホームページへようこそ!

トップページ

学校案内 >

年間行事予定

学校だより

学年だより >

お知らせ

今日のできごと


ワンダー☆発見

### ワンダー☆発見

日時

2022/11/25

いもほりをしたんだね。「1つ見つけたら、そのちかくにもある!」。これは、しておくと、おとくなじょうほうだね!たくさんとれたかな?みんなで、やきいもパーティーしたくなるね!



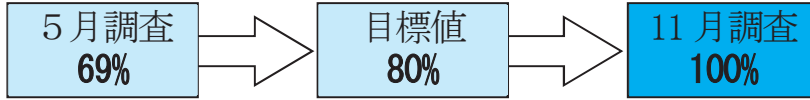
ワンダー☆発見コーナーを設け、子供たちのいろいろな気付きをホームページで公開しています。

教師の価値付けコメントを合わせて発信。

#### 4 研究を支える組織

(教師質問紙) 児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をしていますか。

指標 「①よく行っている+②どちらかといえばよく行っている」の合計



(教師質問紙) 普通の授業で児童の学び合う場を取り入れていますか。

指標 「①よく行っている+②どちらかといえばよく行っている」の合計



#### 指標の達成に向けた実践

##### 実践1 学年団を核とした授業開発チームでの授業実践

本校は、各学年3学級以上の編成である。研究の方法の特徴として、授業者が決まっても学年主任を中心にチームとなり様々な意見を出し合い教材研究や指導案作りを行っている。



##### 実践した教員の声

- ・先行授業を行うことで、想定していた子供の反応と実際の児童の反応との差異が分かり、発問や助言を見直すことができた。また、タイムマネジメントの面でも45分を見据えた活動内容の精査が図れた。
- ・団の先生方からの意見が参考となり、理科以外でも使っている。

##### 先行授業

指導案を基に他クラスの教師が授業を行う。

##### 指導案検討会

全職員で、指導案の検討を行う。

##### さらに先行授業

改善を行い、他クラスで授業を行う。

##### 実践2 「授業づくり部会」「学習規律部・学級経営部会」「環境活用部会」を中心とした研究推進

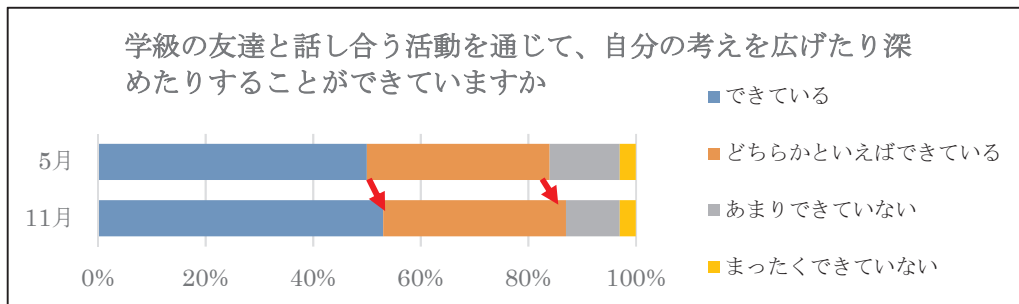
本年度は、理科を中心として、全職員で研究を進めていくために、3部会に分かれて研究を進めた。

- ・授業づくり部会・・・単元化・教材化に向けて教科書5社やNHK for schoolの分析方法の共有  
また、指導案形式の工夫などを行った。
- ・学習規律・学級経営部会・・・「問題解決の道しるべ」や「ファシリテートの道しるべ」をボトムアップ型で行った。
- ・環境活用部会・・・校内や校区、そして子供の感性を見直すことで改めて環境の素晴らしさと子供の感情の素晴らしさに学んだ。

## IV 研究の成果と課題

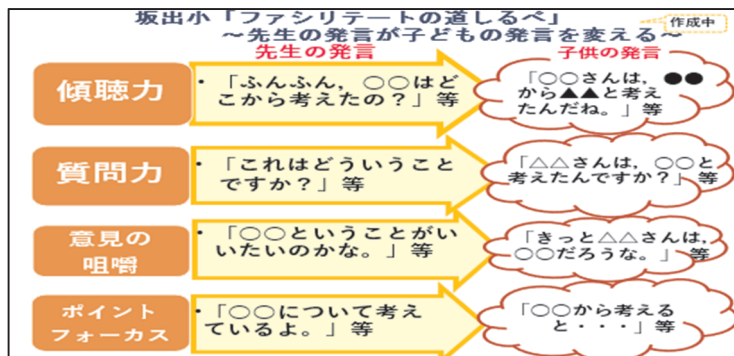
(成果)

- 1 個の文脈を大切にしながら単元化・教材化を図ることで、生活との関わり、他教科への広がりを感じられる子供の姿が見られた。
- 2 (1) 表出・吟味・共有の過程を協働的なものにする中で、結果・考察・結論の問題解決の進め方が身に付いてきた。
- 2 (2) 振り返りの視点を明確にすることで、学びが転移・活用されるような個々の記述や発言が多く見られ、互いの振り返りを共有することができた。
- 3 「ワンダー」を合言葉にすることで、理科学習だけでなく、日常生活でも「心が動いたこと」を言語化する子供が増えつつある。
- 4 学年団チームや全教職員で、研究内容・方法に沿った具体化を進めることで、思考を深める発問など表出・吟味・共有を促す話し合いの充実が図れた。下図のように子供の質問紙調査も向上しており、教員間で喜び合えた。



(課題：指導主事の指導や研究協議から)

- 1 「自然観を豊かにする」こと(香小研理科部会テーマ)との関連を図るために、例えば、エネルギー領域の基本的な概念「物を大きく動かすには、代わりに大きな力が必要である。」は同じエネルギー領域の「音」や「電気」につながる等、系統的な理科学習の構成を教員が意識し、単元化・教材化の工夫を図ることで、児童の自然観を豊かにしていきたい。このことは香川大学教育学部北林雅洋教授による講話において「理科の授業づくりで大切にしたい視点」として、ご指導いただいたことにもつながる。
- 2 (1) 表出・吟味・共有の過程を子供主体で進めたい。そのために、教師のファシリテート力を高めていく必要性を感じている。現在、坂出小「ファシリテートの道しるべ」を作成中である。



- 2 (2) 授業の最後に学習内容を振り返ることは教員も児童も定着が図られてきた。振り返りで表出した3観点(内容面、方法面、心情面)の内容を教師がいかに見取り、価値付けるか、教師の「ワンダー返し」(感嘆の言葉で共感・称賛すること)で、価値付ける言葉かけを構築している。
- 3 「自然を愛する心情」を豊かにする活動としてワンダー☆発見カードを実施し、身の回りの事物・現象に興味・関心をもつ児童も増えてきた。今後さらに環境を整えたり、四季の変化が織りなす校内や地域のワンダーを子供とともに感じたりしていき、家庭・地域へとワンダーを広げていく。何歳になっても不思議なことがいっぱい自然界にわくわくするようなワンダーな心の素地を育てていきたい。
- 4 学年団チーム及び3部会の活動が有機的かつ合理的に進められるよう、プランの見える化、建設的意見を拾い上げるシステム等を工夫するなどして、個人の時間(自己研鑽)にも意欲的に取り組めるようにする。